

市民は不況にあえぎ、市財政は健全化

緊急雇用本格的には9月から

伊勢崎市では昨年派遣切りなどで大量の失業者が街に溢れました。国の経済対策で臨時的に雇用する緊急雇用対策がとられました。当初予算ではわずか50人。その間有効求人倍率は、5月に0・22。6月が0・28という状態が続きました。市が補正予算で、仕事を追加したのが9月になってからです。最終的には261人の雇用となりましたが、雇用情勢が一番厳しかった、春先から緊急雇用の人数を増やせば、もっと的確に失業者の救済が進められました。

百年に一度という緊急事態の認識が欠けていたのではないでしょうか。

雇用安定助成金利用は予算の28%

伊勢崎市に100人以下の中小企業で労働者の解雇を行わず休業した場合、中小企業雇用安定助成金を支給する制度があります。県内では太田市と伊勢崎市の制度で、全国から問い合わせがある施策でした。

国の緊急雇用安定助成金を受けて休業した企業、にその差額を補填するもので、昨年度は3050万円の予算を組みました。

しかし助成額上限を30万円とし、2分の1助成から5分1助成に引き下げた結果、利用は58社に26万円に止まりました。百年に一度という厳しい雇用状況の中で、二千万円を超える雇用対策の予算が残りませんでした。

この事業も財源は国の交付金がすべての事業です。

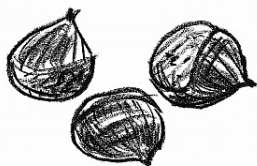
市民の苦況よそに借金減らし貯金殖やす市政

このように、緊急対策は国からの交付金でまかなえる事業しか手を付けず、それも余すというおぞましい仕事ぶりです。一方で市財政の健全度合いを示す指標は

実質公債費比率が 9・1 8・4へ
将来負担比率が 94・6 77・5へ

おおきく健全な方向へ進み、県内旧5市では最も良好な財政の指標です。貯金にあたる財政調整基金も、昨年度12億円増えて52億3100万円となりました。

緊急事態に備えて基金を増やしたと言っていますが、昨年の事態を緊急事態といわずどんなときを緊急事態といえるのでしょうか。



「きたむら」のイベント便

2010年9月12日 892号 発行
日本共産党北島元雄事務所 発行責任者 尾藤孝 波志江町3626



伊勢崎・多喜二祭各地から160人

小説「蟹工船」で知られる共産党作家小林多喜二の文学と生涯を考える第3回伊勢崎・多喜二祭が5日開催され、東京などからも参加者があり各地から160名が参加しました。

午前は小林多喜二が講演会の前に立ち寄り検束された、故菊地敏清宅（北千木町）の見学会が行われました。

午後はフェリス女学院大学の島村輝教授が記念講演をし、故井上ひさし氏の最後の戯曲「組曲虐殺」に描かれた、多喜二像を紹介。井上氏の父親も『戦旗』に寄稿していた事実を語り、先人達につながる思いとして「困難な中でも理想と希望を

北風

本気で養成する気がある？

フィリピンやインドネシアから日本に来て、介護福祉の実技を学び、さて、国家試験を受けようとする漢字が難しくほとんど不合格になっている、と新聞が報じています。

私の手元に大正十年、原富岡製絲所が発行した「国の光」という冊子がありますが、例えば「繰絲要點」には「いとりのかんじんなこと」という振り仮名が付いています。そして、例えば「いとりにぎつけ」の説明では「繰絲湯は餘り低温度と解が悪しく餘り高温度と繭が浮き上がりますから平均百五十度位の温度が適当です。」には「とりゆはあまりぬるすぎると、ほぐれがあしく、あまりあつすぎるとまゆがうきあがりやすから、ならし百五十度くらいにあつさがこるあいです」と振り仮名が振ってあります。

新聞には、合格者が少ないので、これからは厳しく言い換えるとなりましたが、不合格は初から分かっていただけではないかと疑わせます。それとも、昔より指導者に「配慮」というものが無くなったのかな？



(神)

開会挨拶する八田利重実行委員長

